源典侍と光源氏の贈答歌

北原　圭一郎

一　序

源典侍は、登場場面は紅葉賀・葵・朝顔巻に限られているものの、いずれの場面でも源氏と贈答歌を交わしており、計五組の贈答歌が物語中に描かれている。本稿では、これらの贈答歌の特質を分析することで、贈答場面を通して見える源典侍の物語の独自性、『源氏物語』における贈答歌の方法の一端を明らかにすることを目的とする。

源典侍に関する研究は、最も主要な登場場面である紅葉賀巻を中心に為されてきた。その挿話性が以前から指摘されてきたが、近年では、他の人物との対照性、典侍という職掌、老女という性格などの点から、前後の物語中での必然的な位置づけを論じたものが多い[1]。

源氏との贈答歌に言及する論も数多いが、特に両者の贈答歌の特徴や物語中での意義を中心に論じたものとしては、御神楽の発想を前提に、紅葉賀巻の贈答歌から源氏の王者性を読み取る鈴木日出男氏の論[2]、催馬楽のみならず多数の神楽歌の引用を読み取る小嶋菜温子氏の論[3]、密通にかかわる柏木の歌との関連などを論じる久富木原玲氏の論[4]などがある。これらによって、好色な老女との戯れの歌のやりとり、という解釈にとどまらない物語内での意義が追究されてきたと言えよう。しかし一方で、男女の贈答歌としての特質については、引歌や催馬楽引用などの技巧や、いずれも女の側からの贈歌であることによる積極性など、外面的な特徴が指摘されるにとどまり、なお検討の余地があると考えられる。

以下、主に共通する掛け合いの発想に焦点を当てて、紅葉賀巻・葵巻の両者の贈答歌の解釈を整理した上で、男女の贈答歌としての異質性、そのような贈答歌を通じて両者の固有の男女関係を描き出す物語の方法などについて論じることにする。

二　紅葉賀巻の贈答歌

本節では、紅葉賀巻の三組の贈答歌の特徴について考察する。源典侍の登場場面の冒頭では、「人もやむごとなく心ばせありて」「いみじうあだめいたる心ざま」というその性格に加え、[5]「かうさだ過ぐるまで、などさしも乱るらむといぶかしくおぼえたまひければ、戯れ言いひふれてこころみたまふ」「人の漏り聞かむも古めかしきほどなれば、つれなくもてなしたまへるを、女はいとつらしと思へり」（紅葉賀①三三六）など、源典侍に対する源氏の態度についても既に端的に言い表されている。ここでは、年老いてもなお好色な性格に対する関心ゆえに源氏の方から言い寄ってみるものの、人目を憚って冷淡にあしらい、源典侍はそれを恨めしく思っていると述べられている。当初から恋の相手にはなり得ない存在として設定されていることになるが、以下の贈答歌も、当然このような関係性を反映して描かれている。

桐壺帝の梳櫛に伺候していた、年齢不相応に風流めかした源典侍の姿を見た源氏は、「心づきなく」感じながらも、「いかが思ふらん」という関心により、自分から近付いていく。

A　似つかはしからぬ扇のさまかなと見たまひて、わが持たまへるにさしかへて見たまへば、……よしなからず「森の下草老いぬれば」など書きすさびたるを、言しもあれうたての心ばへや、と笑まれながら、「森こそ夏の、と見ゆめる」とて、何くれとのたまふも、似げなく、人や見つけんと苦しきを、女はさも思ひたらず。

〈源典侍〉君し来ば手なれの駒に刈り飼はむさかり過ぎたる下葉なりとも

と言ふさま、こよなく色めきたり。

〈源氏〉笹分けば人や咎めむいつとなく駒なつくめる森の木がくれ

わづらはしさに」とて立ちたまふをひかへて、…

（紅葉賀①三三七～八）

まず、傍線部で示した古歌による掛け合いから解釈していく。源典侍の扇に書かれていた歌は、諸注一致して指摘している通り、

大荒木の森の下草おいぬれば駒もすさめずかる人もなし

（『古今集』雑上・八九二・よみ人しらず／『古今六帖』二・森・一〇四六・小野小町）

の引用である。『古今集』では老いを嘆く歌群に位置する一首で、表面的には「人の寄り付かない、大荒木の森の下に生えている草は、老いてしまったので、馬も好まず、刈りに来る人もいない」といった解釈になるが、「駒もすさめず」は愛されない身の比喩としても用いられる表現であり、当該場面でも恋の嘆きの意味を含んで引用されたと考えられる。[6] 更に、当該歌を肉体的衰えの露骨な比喩と解する説もあり、[7]「うたての心ばへ」（波線部）という源氏の否定的な受け止め方や、[8] 後述するような紅葉賀巻での一連の源典侍の歌表現から考えると、当該歌の表現も性的な連想を喚起するものと解釈できる。

一方源氏は、次の歌によって応じる。

郭公来鳴くを聞けば大荒木の森こそ夏の宿りなるらし

（『信明集』Ⅰ・二八）

源典侍の扇の歌と同じく「大荒木の森」の表現が使われているが、この『信明集』歌では、夏が深まって草木が茂り郭公がとどまる場所として詠まれている。当該場面では、源氏は郭公を寄り付く男たちの意味に取りなすことで、男に相手にされないと嘆く源典侍の引用歌に対し、むしろ多くの男が寄り付く多情な女だと揶揄して応えたと捉えられる。

以上の引歌による掛け合いの性格は、続く贈答歌にも引き継がれている。二首は、源典侍の扇の「大荒木の～」の歌に加え、次の先行歌をそれぞれ引歌とする。

男の来ざりければ遣はしける　小町が姉

わが門のひとむら薄刈り飼はん君が手なれの駒も来ぬかな

（『後撰集』恋二・六一六）

笹分けばあれこそまさめ草枯れの駒なつくべき森の下かは

（『蜻蛉日記』下巻・天延二年十月）

『後撰集』の一首は、「我が家の門前の薄を刈って食べさせる、そんなあなたの飼いならした馬さえも来ないことだ。」という意味で、男の訪れがないことを嘆いた歌。一方、これを引用する源典侍の贈歌は、老いた我が身を「さかり過ぎたる下葉」に喩え、「たとえ盛りを過ぎて寄り付く人もいない下葉のような私であっても」と否定的に表現しつつも、引用歌を反転させて「あなたが来たら、その飼いならした馬に刈って食べさせよう」と詠み、源氏が愛情をかけてくれることを積極的に願う内容となっている。自らを「下

葉」に喩えて「駒」に食べさせようというこの表現は、扇の歌と同様、身体の露骨な比喩をも連想させるものであり[9]、それがここでも源氏に「こよなく色めきたり」（波線部）という否定的印象を与える結果となる。

『蜻蛉日記』の一首は、「駒（兼家）が馴れ親しむことのない、枯れた下草のような我が身であり、通ってきても離れていくだけだ」という、夫に愛されない我が身を詠んだ道綱母の歌。これを引用する源氏の返歌は、それとは逆に、源典侍をいつも馬が慣れ親しんでいるような木陰、つまりいつでも男が寄り付いてくる多情な女だと詠み、それゆえに訪れていけば他の通う男に見咎められるだろうと詠んだ内容である。返歌もまた、先の引用歌で源典侍を多くの男が寄り付く「郭公の宿り」と詠んだのと同様、相手の多情を指摘する発想で成り立っている。

続いて紅葉賀巻第二の贈答場面を検討していきたい。温明殿で琵琶を弾く源典侍の優れた演奏や催馬楽「山城」の歌声に惹きつけられ、ここでも源氏の側から催馬楽「東屋」の一節を歌いながら近づいていく。そこで源典侍が同じ「東屋」の一節で応じるという応酬が為され、続いて「東屋」を踏まえた贈答歌が交わされる。

B　君、東屋を忍びやかにうたひて寄りたまへるに、「おし開いて来ませ」とうち添へたるも、例に違ひたる心地ぞする。

〈源典侍〉立ち濡るる人しもあらじ東屋にうたてもかかる雨そそきかな

とうち嘆くを、我ひとりしも聞きおふまじけれど、疎ましや、何ごとをかくまでは、とおぼゆ。

〈源氏〉人妻はあなわづらはし東屋の真屋のあまりも馴れじとぞ思ふ

とてうち過ぎなまほしけれど、あまりはしたなくやと思ひかへして、人に従へば、すこしはやりかなる戯れ言など言ひかはして、これもめづらしき心地ぞしたまふ。（紅葉賀①三四〇）

まず、催馬楽「東屋」の歌詞の内容について確認しておきたい。源典侍・源氏の歌との対応を、それぞれ傍線・点線で示した。

東屋の　真屋のあまりの　その雨そそき　我立ち濡れぬ　殿戸開かせ
鎹も　錠もあらばこそ　その殿戸　我鎖さめ　おし開いて来ませ　我や人妻

前半の歌は、雨に濡れることを理由に戸を開けることを求めた男の歌、後半の歌は、錠や掛金もないのだから自ら

開けていらっしゃい、私は憚る必要のある人妻でもないのだからと男の要求に応じる女の歌と一応は考えられる。源氏に続いて源典侍が女の歌詞を歌う展開は一見自然な掛け合いであるが、「殿戸開かせ」に対し「おし開いて来ませ」と相手の求愛を積極的に受け入れる女の歌詞は、和歌における女歌の発想とは異質な内容であるとともに、[10] 前の贈答歌と同様、女の身体を喩えた性的内容をも暗示するものであり、それゆえに源氏は「例に違ひたる心地」（波線部）を覚える。

続く源典侍の贈歌は、求愛の表現として用いられた「東屋」の男の歌詞を主に踏まえつつも、待つ女の側の表現として用いたものである。上句では「東屋」の歌詞とは違い自分のために濡れて戸を開けることを求める男がいないことを詠んでおり、東屋に雨の雫だけが降り注ぐ下句の情景も、訪れる人のいない寂しさを強調している。訪ねてくれない源氏への恨みとその嘆きを詠んでいる点では、元の女の歌詞と違って、女の贈歌として常套的な発想に収まっているとも言えよう。[11] しかし、猥雑な歌詞を含む催馬楽を引用して、男に顧みられないことを殊更に嘆いて懸想を訴える表現は、先の引用歌「駒もすさめず」にも通じるものであり、源氏はやはり「疎まし」と不快に思わざるを得ない（波線部）。当該贈答場面の前には「（源典侍は源氏を）見つけ聞こえてはまづ恨みきこゆる」（紅葉賀①三三九）ともあり、こうした恨み言が繰り返されていたと考えれば猶更であろう。

源氏の返歌は、「あまりも馴れじ」という拒絶の言葉を導く序として「東屋の真屋のあまり」という男の歌詞を用い、更に女の歌詞の語も用いて源典侍が「人妻」[12]、即ち他に通う男のいる女であるために面倒な恋だと詠み、これ以上の関係には及ぶまいと拒否した内容である。要するに返歌の方も、源典侍を「郭公の宿り」「駒なつくめる森の木がくれ」とした前の引用歌・返歌と共通する発想であり、「東屋」の歌詞に基づきながらも同様の掛け合いを繰り返していることが確認できる。

以降の展開と第三の贈答歌については、以上の二組の贈答歌との関連でのみ簡単に触れておく。この後源氏は結局源典侍のもとにとどまるが、返歌で述べてきた危惧が実現するかのように、[13] 愛人の一人である頭中将に逢瀬の場を見顕されることになる。騒動の翌朝には、源典侍から残った装束とともに贈歌が贈られ、三組目の贈答歌が交わされる。

C〈源典侍〉うらみても言ふかひぞなきたちかさね引きてかへりし波のなごりに

〈源氏〉あらだちし波に心は騒がねど寄せけむ磯をいかが

うらみぬ　（紅葉賀①三四四）

源典侍の贈歌は、立ち去った二人の男を波に喩え、後に残された恨みを述べた内容で、「底もあらはに」[注1]とまで言い添えて嘆きを訴える。源氏の返歌は、頭中将を「波」に、源典侍を「磯」に喩えて、結果的に男を引き寄せた相手を恨み返した内容である。女の贈歌に対する「面なし」「憎し」という評言や、他の男との関係を指摘する内容も、先の二組の贈答歌とつながるものと言えよう。

以上、第二節では、主にA・Bの贈答歌において、通常の女の歌には用いられない性的表現を詠み込みつつ、男に顧みられない大袈裟な嘆きを訴える源典侍の贈歌、相手の多情を揶揄して懸想を拒否する源氏の返歌という、類似の掛け合いが繰り返されていること、その内容が頭中将乱入という展開やCの贈答歌の内容とも連鎖することなどを述べた。またこれらの歌の内容は、本節の最初にも述べたように、登場場面冒頭に予め描かれた両者の関係に沿った形で展開されていることも確認しておきたい。このような特徴的な贈答歌が、即妙な古歌・催馬楽の引用や場に即した修辞などを用いて為される点も、「人もやむごとなく心ばせありて」という源典侍の高い教養と出自を反映していると言えるだろう。

三　葵巻の贈答歌

本節では、葵巻の贈答歌にも、紅葉賀巻の例と共通する特徴が見られることを確認する。賀茂祭当日、源氏が紫の上と同乗して見物に出る場面で、混雑のため車をとめる場所もなく立ち往生していたところ、場所を譲ろうと言う女がいる。源氏が車を寄せて言葉をかけると、女は檜扇の端を折って和歌を書きつけて贈ってくる。

D　いかなるすき者ならむと思されて、所もげによきわたりなれば、ひき寄せさせたまひて、「いかで得たまへる所ぞとねたさになん」とのたまへば、よしある扇の端を折りて、

〈源典侍〉はかなしや人のかざせるあふひゆゑ神のゆるしの今日を待ちける

注連の内には」とある手を思し出づれば、かの典侍なりけり。あさましう、古りがたくもいまめくかな、と憎さに、はしたなう、

〈源氏〉かざしける心ぞあだに思ほゆる八十氏人になべてあふひを

女はつらしと思ひきこえけり。

〈源典侍〉くやしくもかざしけるかな名のみして人だのめ

なる草葉ばかりを

と聞こゆ。　（葵②二九～三〇）

「葵・逢ふ日」を掛詞として、賀茂祭の日における恋歌贈答の題材とするという、同時代の「葵」の用法に則って詠まれた贈答歌である。最初の源典侍の贈歌については、「人のかざせるあふひ」の部分の解釈を中心に検討したい。「人とあひ乗り給へるを人のかざせるとはいふなるべし」[15]と述べられて以来、現在の注釈でも、「「人の挿頭せる」には、同車の女紫君に占有せられて居るの意を寓し、「葵」は源氏に比し且「逢ふ日」に掛く。」[16]といった見解を取るものが多い[17]。一方、逆に源氏がかざしている「葵」と解釈し、「葵」を紫の上の寓意とする見解もある[18]。但し、同時代の「（人が）葵をかざす」という表現の用例を見ると、「葵」を人物の寓意とする例よりも、文字通り葵を挿頭として挿す行為を指す例、「逢ふ日」との掛詞によって比喩的に逢瀬を意味する例が多い。

車に乗れる人賀茂に詣づ

人もみなかづらかざしてちはやぶる神のみあれにあふひなりけり

（『貫之集』Ⅰ・一三〇／『古今六帖』二・やしろ・一〇七七）

ちはやぶる神の卯月になりにけりいざうちむれてあふひかざさん

（『古今六帖』六・あふひ・三九五一）

ちはやぶる賀茂のあふひを祈りつつかざして君を頼みけるかな

（『信明集』Ⅰ・五四）

かざさじとたれか思はんちはやぶる神のまれまれ許すあふひを

（『和泉式部集』Ⅰ・二七）

これらの例や、後述のように「みな人」と組み合わされる例から考えると、当該歌においても必ずしも「葵」に源氏・紫の上という寓意を読み取る必要はなく、祭りの場において人々が挿している葵草そのものと捉え、「人々が挿頭に挿している（逢う日を連想させる）葵草ゆえに、神が逢うことを許した今日を待っていたとは、はかないことだった。」と解することもできるのではないか[19]。いずれにしても当該歌は、「葵」という歌ことばに基づく逢瀬の期待が裏切られたことを「はかなし」と述べることで、源氏への未練を率直に語った贈歌であると言える。

源氏は筆跡から相手が源典侍であることに気付くと、年齢不相応な若々しい振る舞いに「あさまし」と呆れつつ（波線部）、不愛想に次の返歌で応じる。「かざしける心」は、葵祭の日に源氏との逢瀬を願った源典侍の心、「八十氏人になべてあふひ」は、誰彼となく多くの人に逢える葵祭の日を意味している。相手を「あだ」とする発想は、直接的に

は引歌として指摘される次の『後撰集』歌を踏まえるが、葵祭の日は誰もが葵をかざすものであるという発想、それゆえに葵祭の「あふひ」にかこつけるのは気持ちが浅いとする以下の贈答歌のような発想に通じるものであろう。

賀茂祭の物見侍りける女の車に言ひ入れて侍りける　よみ人しらず

ゆきかへる八十氏人の玉かづらかけてぞたのむ葵てふ名を

返し

ゆふだすきかけても言ふなあだ人の葵てふ名はみそぎにぞせし　（『後撰集』夏・一六一―一六二）

卯月の御阿礼の日のまたの日、ついでありてなるべし

ちはやぶる神に祈りしあふことは草葉につけて今日ぞ見ゆめる

返し

みな人のなべてかざせばあふひ草いづれをそれのしるしとか見む　（『清正集』八五―八六）

禊のまたの日、女のもとへやるとて、男の詠ませし

今日を我があふひともがなみな人のかざすその日はうれしげもなし　（『和泉式部続集』二九九）

よって源氏の返歌は、葵をかざした源典侍の心、つまり「葵」にかこつけて逢うことを期待した源典侍の心を軽薄なものとし、その理由として、葵祭の日は誰にでも逢える日だからと述べていることになる。源典侍の心を「あだ」と述べることで懸想を退けるというこの贈答歌も、他の男との関係を示唆して反発する紅葉賀巻の贈答歌と類似する内容を持っていることが確認できる。[20] また、源典侍の「あだ」という性格、源氏の冷淡さに対する「つらし」という心情も、両者の関係性を語った登場場面最初の叙述に一致するものであり、その点からも紅葉賀巻との連続性、源典侍の一貫した造型がうかがえる。

源典侍の更なる返歌の内容は、かざした「葵」草を、名前ばかりで人に期待させるだけの草葉に過ぎないとして、逢瀬を期待した後悔を述べる歌である。紅葉賀巻の例のような極端な性的表現は伴わないが、「葵＝逢ふ日」という歌の修辞を根拠に言い寄り、報われないことを「はかなし」「くやし」とまで述べる厚かましさが、ここでも源氏を辟易させる。

なお両者の贈答歌は、この他にも朝顔巻の、桃園宮で再会した場面に一組描かれている。

E〈源典侍〉年ふれどこの契りこそ忘られね親の親とか言ひしひと言

〈源氏〉身をかへて後も待ちみよこの世にて親を忘るるためしありやと　（朝顔②四八四）

詳細な解釈は省くが、子・親の関係に擬しつつも源氏との関係に依然として執する源典侍に、源氏は「うとまし」と感じながらも、忘れることはないと表面上は慰める内容で返歌をする。この贈答歌については、朝顔巻に再登場する意義と合わせて改めて考察したい。

四　男女の贈答歌としての特徴

前節までに、猥雑な表現を含みつつ執念深く懸想や恨みを訴える源典侍の贈歌と、それを否定的に受け止め、相手の多情を理由に懸想を退ける源氏の返歌という、類似した贈答歌の掛け合いの繰り返しによって両者の物語が描かれていることを述べた。

なお、源典侍の造型や源氏との関係については、従来から『伊勢物語』六三段との関連が指摘されてきた。しかし六三段は、最終的に女の歌が「あはれ」を誘い男を引き留めるという物語であって、贈歌によって源氏に繰り返し嫌悪感を与え続ける源典侍の物語とは、その点で同一の話型と言い切ることはできない[21]。また、老女が歌を詠む物語としては、『大和物語』一二六段の檜垣嫗の物語もよく挙げられる。しかし源典侍の、淫靡な老いの表現で男を誘うA、源氏との関係を「親・子」という言葉で語るEなどの歌は、老いの象徴である「白髪」や月日の経過など、嘆老の歌の類型とも異なる表現によって老いを詠んだものである。贈答歌に着目することで、まずはこれらの先行物語との差異が明らかになる。

更に本節では、このような両者の贈答歌の独自性を、同時代の男女の贈答歌の様式と比較して明らかにすることで、源典侍の物語における贈答歌の意義を考察したい。

特に、女の贈歌に対する男の一般的な応じ方という点から、源氏の返歌に見られる特徴を考える。女の贈歌に対する男の返歌は、相手の女への愛情を語って切り返すというのが一つの定型であると考えられる。鈴木日出男氏は、恋の贈答歌の掛け合いに男女それぞれの型があることを明らかにしたが、女の歌は贈歌であっても反発の契機を含み、男の歌は返歌であっても懸想の表現を取ることを述べている[22]。『源氏物語』には、女から贈られた歌に男が返歌する例が七〇例あるが、源典侍の贈歌のように、男との愛情に関わる不安や嘆き・恨みを詠んだ贈歌は三九例、そのうち

女への愛情・変わらぬ心を強調して慰めるという型の返歌が二二例[23]見られ、過半数が類似の掛け合いで成り立っていることがわかる。例として、花宴巻の、朧月夜との最初の逢瀬の後の贈答歌を挙げておく。

〈朧月夜〉うき身世にやがて消えなば尋ねても草の原をば問はじとや思ふ

〈源氏〉いづれぞと露のやどりをわかむまに小篠が原に風もこそ吹け　（花宴①三五七～八）

贈歌は、「なほ名のりしたまへ」と執拗に名を問う源氏の言葉への反発として詠み出されたもので、我が身がこの世から消えてしまったら、私の墓所までは訪ねてくれないのかと、源氏の想いの浅さを非難した内容。源氏の返歌は、「露のやどり」のようにはかないあなたの居場所を探している間に、二人の仲が妨害され絶たれてしまっては大変だとして、相手への想いが決して浅くはないことを弁解する内容である。[24]

こうした他の女君に対する、贈答歌の原則通りの応じ方と比べると、源典侍との贈答歌がそれと異質であることは明らかであろう。[25] また、単に典型的な男女の贈答歌と異なるというだけでなく、作中には他に皆無であり、他作品や歌集にも容易には見出すことができない。そのことを続いて確認していきたい。

第一に、複数の男と関係を持つ浮気な女、「色好み」とされる女との贈答歌と比較して考える。これらの例は歌集や歌物語に少なくないが、その多くは、相手の女の多情ゆえに抱く危惧、女の浮気を知った上での恨みなど、男の側の執心を語った内容の贈歌であり、両者の贈答歌とは本質的に異なると言える。『伊勢物語』から例を挙げると、[26] 例えば三七段では、男が「色好み」な女の心情を「うしろめたく」思い、「我ならで下紐解くな朝顔の夕影またぬ花にはありとも」という歌を贈る。多情な女を移ろいやすい朝顔の花に喩えながらも、他の相手との情交を禁ずる内容を詠んでいる点に、女への執着が表れている歌である。また四三段では、他の男との関係を知った男が「ほととぎす汝が鳴く里のあまたあればなほうとまれぬ思ふものから」という歌を贈る。この歌では、多情な男の比喩として詠まれることの多い「ほととぎす」を女の寓意として用いて非難しつつも、「思ふものから」という言葉で相手への断ちがたい執着をも表現している。

第二に、源典侍への返歌と同様、女の多情を非難する内容を持つ男の返歌と比較して考える。歌集等に若干例が見出せるが、やはり源典侍の例と同一には捉えられない。三

代集の中から『後撰集』の一例を挙げる。[27]

男の、ここかしこに通ひ住む所多くて、常にしもとはざりければ、女も又色好みなる名たちけるを、うらみ侍りける返事に　　源頼が女

つらしともいかが怨みむ郭公わが宿近く鳴く声はせで

返し　　敦慶の親王

里ごとに鳴きこそ渡れ郭公すみか定めぬ君たづぬとて

（恋一・五四七–五四八）

女が男を多情な郭公に喩え、私を訪れてもくれないのに恨む資格はないと詠んだのに対し、男は「色好み」な女を郭公の縁で「すみか定めぬ君」と表現し、居場所の定まらないあなたを探すためにあちこち歩き回っているのだと、逆に相手を恨む内容で返歌する。但し詞書によれば、先に男が恨んで贈ってきた歌に対して女が相手の多情を非難して反発し、更に男が切り返したという形式で、あくまで相手の歌の表現から導かれた発想である。また内容としても、結局は相手の女への関心を語っていることに変わりはない。もう一例、歌物語の中から『伊勢物語』一九段を挙げる。

〈女〉天雲のよそにも人のなりゆくかさすがに目には見ゆるものから

〈男〉天雲のよそにのみしてふることはわがゐる山の風はやみなり　　（一九段）

近くにいながら訪れの途絶えた男に対し女から歌を贈るが、男はその理由を、山に吹く風が速すぎるから、つまり女の側に原因があるからだと仄めかして返歌する。歌の傍線部の表現は、地の文で「…とよめりけるは、また男ある人となむ言ひける」と他に男のいる女だったと説明されることによって初めて、女の浮気を指していると判断されるものの、歌の表現自体は具体的事情を語っていない。

第三に、より広く相手の多情を指摘する内容が見られる例と比較したい。こうした構図自体が、むしろ多情ゆえに相手の男を信用できないとする女の返歌の類型的な言い回し[28]に近いのではないか。例えば、相手の心を「あだ」として退けるDの源氏の返歌の表現も、元の『後撰集』の引用歌では女が男に対して用いたものであった。物語中では、例えばDと同じ葵祭の日に交わされた源氏と紫の上との贈答歌などが、その典型例であろう。

〈源氏〉はかりなき千尋の底の海松ぶさの生ひゆく末は我のみぞ見む

〈紫の上〉千尋ともいかでか知らむさだめなく満ち干る潮ののどけからぬに　　（葵②二八）

返歌は、源氏の定まらない心を「満ち干る潮」に喩えることで、将来まで見届けようという源氏の贈歌の表現に切り返した内容である。なお、この対照的な紫の上との例と連続して描かれることで、Dの源典侍との贈答歌の異質さがより際立っているとも言えるだろう。[29]

以上から、源典侍と源氏の贈答歌の掛け合いの形式、特に女の多情を理由に拒否するという返歌の形式が、作中や他作品には他に見られず、現実に男女間で交わされる贈答歌とは異なるものであったことが分かる。源典侍の物語においては、このような異質な贈答歌を通して、好色な老女による一方的な懸想とそれを疎ましく思う源氏という、両者固有の男女関係が具体的に描き出されているのだと考えておきたい。

最後に、現実の型通りではない贈答歌を通して物語に独自な人物関係を描くという方法が、物語内の他の人物間にも見られることを確認しておく。源典侍に近い一例として、近江の君が夕霧に懸想を言いかける場面の贈答歌を挙げる。

〈近江の君〉おきつ舟よるべなみ路にただよはば棹さしよらむとまり教へよ

〈夕霧〉よるべなみ風のさわがす舟人も思はぬかたに磯づたひせず　（真木柱③三九九）

近江の君が雲井雁との関係を揶揄して相手を誘ったのに対し、夕霧が身寄りの定まらない自分でもあなたのような気の無い人には寄り付かないと切り返した内容である。女を「思はぬかた」として明確に拒絶する言葉は、相手を近江の君と認識した上での愚弄するような詠みぶりであり、源典侍の例と同様、女に対する男の返歌の言い回しとしては異例だと言えよう。女の側から歌を贈る作中人物たちの中でも、それに対する返歌の内容は、先述した朧月夜の例のような、相手への愛情を強調し慰めるという原則通りの内容だけでなく、相手の女の恋の対象としての位置付け次第で描き分けられていることが確認できる。

五　結

紅葉賀巻、葵巻の源典侍の物語では、懸想や恨みを大袈裟な表現や性的表現で訴え続ける源典侍の贈歌と、女の多情を理由に拒否する源氏の返歌という、類似の掛け合いに基づく贈答歌が繰り返し描かれていた。そして、こうした形式は他の男女の贈答歌に比較して考えると異例であり、それを通じて両者の固有の男女関係が描き出されていることを指摘した。貴族社会の日常における社交手段としての、

様式化された贈答歌の実態の反映にはとどまらず、源典侍の例のようにそこから外れた贈答歌をも配置して多様な男女関係を描いていくのが、『源氏物語』の贈答歌の方法の一つであると考えられる。人物間の贈答歌の特質を明らかにすることも、物語内の人物関係を読み解く一つの手段であろう。

【注】

（1）伊藤博「源典侍挿話の周辺―紅葉賀・花宴巻断想―」（『源氏物語の原点』明治書院、一九八〇・一一、初出一九七一・三）、篠原昭二「運命と行為―たがい目の実現をめぐって―」（『源氏物語の論理』東京大学出版会、一九九二・五、初出一九七一・六）、三谷邦明「源典侍物語の構造―織物性あるいは藤壺事件と朧月夜事件―」（『物語文学の方法Ⅱ』有精堂出版、一九八九・六、初出一九八〇・一〇）などが先駆的な論。

（2）「源典侍と光源氏」（『源氏物語虚構論』東京大学出版会、二〇〇三・二、初出一九九二・四）

（3）「光源氏と源典侍―神楽歌から」（『源氏物語批評』有精堂、一九九五・七、初出一九九五・一）

（4）「天照大神の巫女たち―六条御息所、そして源典侍」（『源氏物語 歌と呪性』若草書房、一九九七・一〇、初出一九九五・一一）

（5）三谷邦明（注1）論文は「この冒頭の紹介文で彼女の輪郭はほぼ理解できる」と述べている。

（6）栗山元子「源典侍における老いと好色について」（『人物で読む『源氏物語』―朧月夜・源典侍』勉誠出版、二〇〇五・一一）は、当該歌が『古今六帖』では小町詠とされていることから、当時老女の悲嘆を詠ったものとして捉えられていたと指摘する。

（7）小沢正夫・松田成穂『新編日本古典文学全集　古今和歌集』（小学館、一九九四・一一）、鈴木日出男（注2）論文など。

（8）「かく事こそおほけれ、すき〳〵しき心にもある哉と思す也」（『源氏物語新釈』、引用は『賀茂真淵全集一三』（続群書類従完成会、一九七九）。

（9）小嶋菜温子（注3）論文及び「〈老い〉の身体と性―源典侍と神楽歌・再説」（『源氏物語の性と生誕　王朝文化史論』有斐閣、二〇〇四・三、初出一九九五・一一）。なお小嶋氏は、当該贈答歌に神楽歌「其駒」「篠」の引用を指摘する。

（10）鈴木日出男（注2）論文

（11）外山敦子「源典侍―重畳する両面性が織りなす物語―」（『源氏物語の老女房』新典社、二〇〇五・一〇、初出二〇〇二

・三）

（12）平安和歌には例が少ないが、『後撰集』に、詞書の「出でける家のあるじ」を指して「人妻に心あやなく掛橋のあやふき道は恋にぞありける」（恋二・六八八・よみ人しらず）と詠んだ例があることから「他人の妻」という意味で理解でき、危うい恋という連想を伴うものであったこともわかる。

（13）侵入者を「修理大夫」と勘違いした源氏が「あな、わづらはし。出でなむよ。…」（紅葉賀①三四一）と語る箇所は、表現の上でも二組の贈答歌と照応している。

（14）「別れての後ぞ悲しき涙河底もあらはになりぬと思へば」（『新勅撰集』恋四・九三七・よみ人しらず）を引き、涙も枯れるほど泣き尽くしたと嘆きを訴える。

（15）『岷江入楚』、引用は中田武司編『岷江入楚一（源氏物語古注集成一〇）』（桜楓社、一九八〇）

（16）島津久基『対訳源氏物語講話 巻六』（名著普及会、一九八三・五）

（17）「葵」が相手の男の寓意となる例としては、次の一首が見出される。

賀茂の祭の日、語らひし人のもとより、あふひにつけてちはやぶる神かけつつぞ恨めしきよそのかざしとなれるあふひは

（『輔親集』Ⅰ・九四）

（18）新間一美「源氏物語葵巻の「あふひ」について—賀茂の川波—」（『平安朝文学と漢詩文』和泉書院、二〇〇三・二、初出一九九七・三）、久富木原玲（注4）論文

（19）「ゆゑ」も原因・理由で解する方が同時代の通例に近い。

（20）鈴木裕子「源典侍攷—物語世界の悪戯者—」（『駒沢短期大学研究紀要』二三、一九九五・三）は、紅葉賀巻の贈答歌との類似を指摘し、「源氏は結局多情で煩わしい老女という類型を外して源典侍をみることなど到底できなかったらしい」と述べる。

（21）『伊勢物語』六三段との類似性は、村井順『源氏物語論・上』（中部日本教育文化会、一九六二）などで指摘される。但し、六三段の物語に収まらない源典侍の物語独自の性格も既に他の観点から指摘されている。外山敦子（注11）論文、吉田幹生「歌物語としての源氏物語—紅葉賀巻の源典侍物語をめぐって—」（『〈物語史〉形成の力学（新時代への源氏学8）』竹林舎、二〇一六・五）など。

（22）「女歌の本性」（『古代和歌史論』東京大学出版会、一九九〇・一〇、初出一九八九・五）

（23）『新編国歌大観』歌番号で示す。夕顔14—頭中将15、空蟬37—源氏38、朧月夜103—源氏104、六条御息所115—源氏116、六条御息所133—源氏134、朧月夜146—源氏147、朧月夜156—源氏

157、花散里174―源氏175、六条御息所194―源氏196、紫の上218―220、明石の君235―源氏236、明石の君239―源氏240、紫の上252―源氏253、紫の上303―源氏304、明石の君307―源氏308、末摘花350―源氏351、花散里376―源氏377、紫の上463―源氏464、紫の上473―源氏474、女三の宮522―源氏523、中将の君573―源氏574、按察の君708―薫709

(24) 朧月夜は、源典侍と同じく源氏に対する贈歌が多く、造型の対照性も指摘されるが、源氏の返歌はいずれも、変わらぬ愛情を訴え慰めるという恋の贈答歌における典型的な男の応じ方となっている。

〈朧月夜〉心からかたがた袖をぬらすかなあくとをしふる声につけても

〈源氏〉嘆きつつわがよはかくて過ぐせとや胸のあくべき時ぞともなく　（賢木②一〇六）

〈朧月夜〉木枯の吹くにつけつつ待ちし間におぼつかなさのころもへにけり

〈源氏〉あひ見ずてしのぶるころの涙をもなべての空の時雨とや見る　（賢木②一二七～八）

(25) 本稿と観点は異なるが、贈答歌の「原理」から外れる物語の贈答歌の表現性について論じたものに、高野晴代「『澪標』巻の贈答歌―選択された齟齬」（『むらさき』四二、二〇〇五・一二）などの論がある。

(26) 三代集では『後撰集』恋一・五九六、恋四・八四四、恋六・一〇四二など。

(27) 二首以上の組で採られた恋部の贈答歌で、女の側からの贈答歌として描かれる例として、『古今集』六例、『後撰集』二四例、『拾遺集』一例の中での検討。

(28) 『後撰集』恋二・六五九、恋二・六九六、恋三・七三六など。

(29) 表現内容の異なる贈答歌の対比という方法は、吉見健夫「花散里巻の和歌―源氏物語の歌物語的方法について」（『中古文学論攷』一五、一九九四・一二）などに論じられている。

※『源氏物語』、『伊勢物語』、『蜻蛉日記』、催馬楽「東屋」の引用は、小学館『新編日本古典文学全集』、和歌の引用は、私家集は『新編私家集大成』、その他は『新編国歌大観』によったが、適宜表記を改めた。